

物価と賃金

— 今回の物価上昇局面と第二次オイルショック時との比較 —

主任研究員 浅野 学

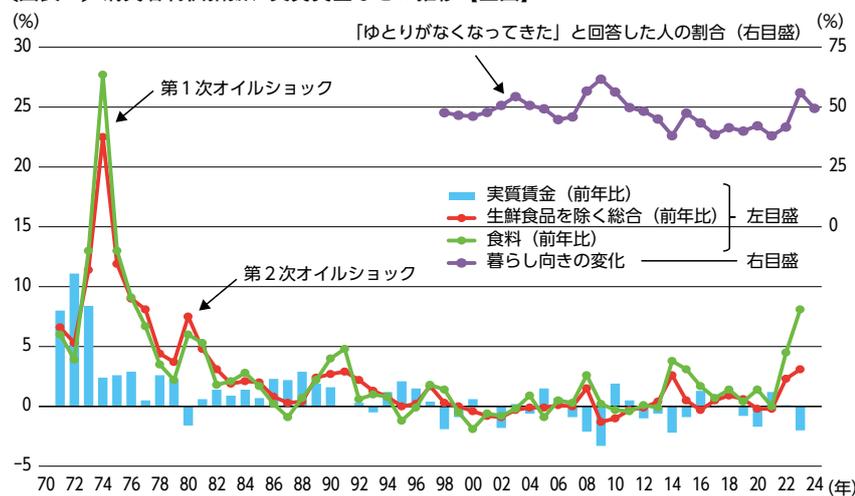
近年はロシアのウクライナ侵攻や急速な円安などにより、物価の上昇が続いている。約50年前の第一次オイルショックの際も、海外情勢を機に物価が急騰した。これら現在と過去の物価上昇局面について、統計資料を基に比較したい。

消費者物価と実質賃金による比較

第一次オイルショックとは、1973年10月に勃発した第四次中東戦争により、産油国が原油価格の引き上げや原油生産の段階的削減を行ったことを端緒に発生した混乱の総称である。この時の混乱を象徴するテレビ映像として、スーパーでトイレットペーパーを奪い合う姿が有名だが、「狂乱物価」という造語が生まれるほど物価が上昇した。当時の消費者物価指数をみると、生鮮食品を除く総合（年平均）は74年に前年比+22.5%と急騰した後、75年も同+11.9%と2ケタの上昇が続いた。このような状況に対して、物価上昇分を除いた実質賃金（年平均）は、74年が前年比+2.4%、75年が同+2.6%と増加した（「図表1」。つまり、物価上昇以上に賃金が増えており、計算上は庶民生活を圧迫することはなかった。

一方、今回の物価上昇局面をみると、生鮮食品

【図表1】消費者物価指数、実質賃金などの推移【全国】



資料：総務省「消費者物価指数」、厚生労働省「毎月勤労統計調査」、日本銀行「生活意識に関するアンケート調査」より作成

※実質賃金（前年比）… 年平均、2020年=100とした実質賃金指数（30人以上）

※消費者物価指数（前年比）… 年平均、2020年=100

※暮らし向きの変化 … 「ゆとりがなくなってきた」と答えた人の割合（各年3月調査の数値を掲載）

を除く総合は22年が同+2.3%、23年が同+3.1%であり、第一次オイルショック時ほどの上昇率ではない。ただし、23年の実質賃金は同▲2.0%と、賃金の増加が物価上昇に追いついておらず生活が苦しいと感じる人が多い。実際、日本銀行

の調査によると、1年前と比べた暮らし向きに関して約半数が「ゆとりがなくなってきた」と回答している（「図表1」）。

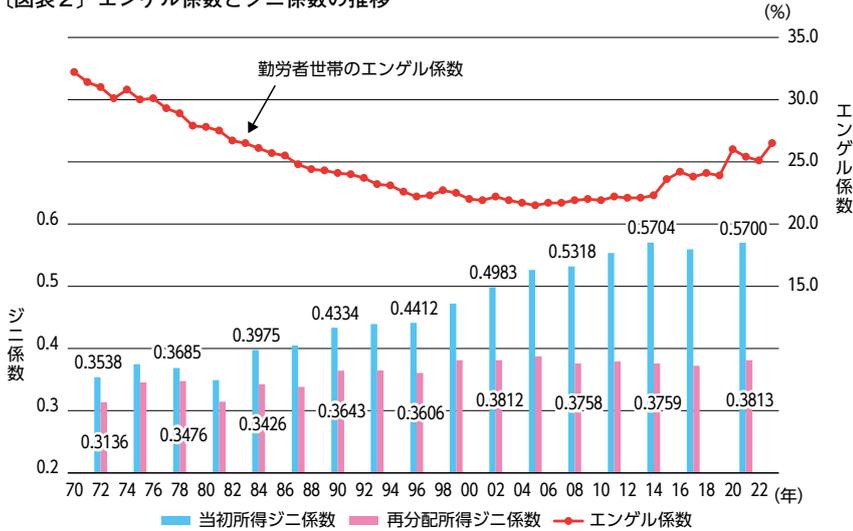
エンゲル係数とジニ係数による比較

エンゲル係数は、家計の消費支出に占める食費の割合で、高くなるほど生活水準が低くなる傾向がある。また、ジニ係数は所得などの分布を表す指標で「0から1」の間で推移し、0に近いほど所得格差が小さく、1に近いほど所得格差が大きいことを表す。一般的な目安は0.5であり、これを超えると税や社会保険などによる是正が必要になるとされている。

第一次オイルショック時のエンゲル係数をみると、74年は30.8%と前年比0.7ポイント上昇した（「図表2」）。この年は食料品が前年比同+27.7%と急騰しており、現在と同様、家計の節約志向が強まったと推察される。

また70年代当時は、「一億総中流」といわれたように、自分の生活水準を「中の中」と答える人が多かった。ジニ係数はこの回答結果を端的に表している。例えば72年のジニ係数をみると、当初所得が0.3538で、再分配所得は0.3136

〔図表2〕 エンゲル係数とジニ係数の推移



資料：総務省「家計調査年報」、厚生労働省「所得再分配調査」より作成

（税や社会保険などによる調整後）と、両者に大差はなかった。つまり、少しの調整で済む程度の所得格差だったと考えられる。しかも、エンゲル係数が年々低下傾向にあったことから類推すると、どの家庭においても家計は決して楽とはいえないものの、頑張っただけで働いていけば給料が上がり、徐々に生活レベルが向上するという希望を持っていたと思われる。

一方、今回の物価上昇局面はこのような状況とは大きく異なっている。近年、エンゲル係数は上

昇傾向にあり、23年は26.5%まで高まっているほか、21年の当初所得ジニ係数は0.5700と調整目安の0.5を超えるレベルに上昇している〔図表2〕。税や社会保険による是正の結果、再分配所得ジニ係数は0.3813に抑えられているとはいえ、庶民の多くはその効果を実感できず、格差が広がっていると感じているはずだ。加えて、賃金の増加率が物価上昇率を下回っており、生活が苦しくなっているのが実態だろう。しかも、急速に進む少子化と高齢化を前に、将来への不安が重くのしかかっている。

神戸市の物価による比較

〔図表3〕は主要品目の価格推移について、50年前と今回に分けて一覧表にしたものである。第一次オイルショック時の物価動向をみると、例えば食パン1kgの価格（年平均）は、オイルショック前の72年は176円だったが、75年には263円と3年間で1.49倍になった。その後、77年までの5年間で同1.74倍になっている。牛肉（ロース100g）はさらに上昇率が大きく、75年に2.10倍、77年に2.60倍に跳ね上がっている。一方、今回の局面では、20年から23年にかけての3年間で、鶏卵が1.41倍になったが、他は1.20倍前後（牛肉は0.99倍）であり50年前の前半3年間ほど急騰していない。

ただし、今後さらに円安が進んで輸入品の価格が上昇し、これが他の品目の価格引き上げにつな

〔図表3〕 神戸市の物価推移（年平均）

（単位：円）

品目	第1次オイルショック（50年前）							今回の円安局面					
	1972年	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	上昇率(倍)		2020年	2021年	2022年	2023年	備考
							72→75(3年間)	72→77(5年間)					
食パン	176	180	259	263	285	307	1.49	1.74	418	416	447	490	1kg
小麦粉	82	85	133	134	150	161	1.63	1.96	247	257	285	305	1kg
牛肉	204	317	390	428	514	531	2.10	2.60	805	862	859	799	国産ロース100g
豚肉	115	132	144	178	203	198	1.55	1.72	248	253	257	279	国産バラ100g
牛乳	28	32	43	46	51	52	1.64	1.86	217	216	218	241	1本(200ml)
鶏卵	238	262	326	356	324	353	1.50	1.48	213	214	215	301	10個入り1パック
板チョコ	50	50	73	100	100	100	2.00	2.00	205	206	218	239	1枚(100g)
インスタントコーヒー	503	503	605	659	701	1,030	1.31	2.05	912	909	958	1,029	100g
フリーニング代	83	93	121	137	147	165	1.65	1.99	197	201	215	221	ワイシャツ1枚
フリーニング代	679	711	851	900	925	968	1.33	1.43	1,341	1,353	1,442	1,583	背広上下1着
タクシー代	158	160	180	280	280	313	1.77	1.98	1,529	1,540	1,540	1,692	4km、昼
ガソリン代	58	67	98	115	121	124	1.98	2.14	141	156	174	175	1L

資料：総務省「小売物価統計調査」より作成
※第1次オイルショック…1973年10月に勃発した第四次中東戦争を機に始まった。

がる懸念がある。また、50年前のインスタントコーヒーのように、少し遅れて値上がりする品目も出てくるだろう。加えて、円安の進行に歯止めをかけるための利上げが企業業績を悪化させ、賃上げに影響するかもしれない。いずれにしても、実質賃金が増加しない限り、家計にとって厳しい状況がしばらく続く可能性が大きいと考えられる。